室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華村における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言語彙について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): dialectal words, winds, tidal currents, Oshima Peninsula, ecological environment 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3304

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華村における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言語彙について

その他（別言語等）のタイトル	Dialectal Words Related to "Winds" and "Tidal Currents; Waves" in Todohokke
著者	橋本　邦彦
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	12
ページ	3-23
発行年	2014-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/3304

北海道言語文化研究 北海道言語研究会
No. 12, 3-23, 2014.

椴法華村における「風」及び「潮」・「波」に関連した方言語彙について*

橋本 邦彦

Dialectal Words Related to “Winds” and “Tidal Currents; Waves” in *Todohokke*

Kunihiko HASHIMOTO

Abstract : The purpose of this paper is to elucidate the details about the dialectal words referring to “winds” and “tidal currents; waves” of *Todohooke* located in the eastern region of the *Oshima* Peninsula. They have been collected by our fieldwork, some books and documents of the local fishing industry, and several dictionaries of the *Hokkaido* dialect and weather phenomena. Each item concerned includes a dialectal word written in *katakana* letters, the meaning with brief comments, the example sentences, the recorded places and other sources. All the words listed were proof-read by the interview research with two local fishers at the age of 70’s. It is revealed that the dialectal words of *Todohokke* have unique characteristics closely related to the geographic features, distinguished from those of the western region of the peninsula and other parts of Japan.

Keywords：dialectal words, winds, tidal currents, Oshima Peninsula, ecological environment

1. はじめに

椴法華方言は、北海道方言の中の海岸部方言に属する。函館市を基点とすると、それより西の津軽海峡を含む日本海側で話される松前方言に対し、東の津軽海峡を含む太平洋側の方言を道南方言と呼んでいる。石垣（1976:233）によれば、上磯、亀田、茅部の三郡には、下北半島の西及び北の方言（南部方言に津軽方言が加わったもの）が直接影響を及ぼした。実際、下北半島の西北部と渡島半島東岸部とは古い時代から交流があった。2000 年に実施された「道南渡島半島東岸部方言の緊急調査」では、椴法華村の漁師は津軽海峡を「しおの川」、下北方面から連れて来た花嫁を「落ちりんご」と呼んできたとの証言を得ている（島田・橋本・寺田・塩谷 2001）[1]。

椴法華方言は隣接する恵山町及び南茅部町を含む下（しも）海岸の言葉の中核を成す。『北海道のことば』（1999:109）で述べられているように、三つの町村の方言間にはほとんど差異がないと言われている。大沢（1974:53）は、渡島半島東岸部及び西岸部で話されている方言

を「道南漁村共通語」、通称「浜ことば」と命名した上で、この方言が下北方言、南部方言、津軽方言を中心とした東北方言を基盤としながらも、新潟県、富山県、福井県などの北陸地方の諸県、並びに長野県、山梨県、岐阜県等の中部方言からかなり強い影響を受けていて、「東北方言の亜流とは言い切れない」と語っている。先の調査や 2004 年の実地調査でも、数え歌の歌詞に「越後の新潟、三条」という文句があることや、戦前女性の多くが 10 代の頃に数年間福井県の紡績工場で働いたとの証言を、80 歳前後の男性と女性の調査協力者から聞いている（島田・橋本・寺田・塩谷 2004）。北海道の方言を考察する場合、本州の隣接する地域だけではなく、入植者や出稼ぎ者の出身地域の方言からの影響をも考慮しなければならないのである。

橋本・島田（2013:25）では椴法華方言について、次の指摘がなされている：「椴法華の位置する道南地域沿岸部には室町（時代）以降という比較的古い時代から主として漁業に従事する者の移住があったため、東北北奥地方の方言に由来する言葉を基層にして明治以降の、福井、新潟等の北陸地方の方言やその他の本州地方の方言が取り込まれていく形で今日の方言の姿になったと考えられる。」

地形に代表される地理的条件、気象、波や潮流などの環境に根ざした言葉は漁業関連方言語彙の中で大切な位置を占めている。この種の語彙は、漁業に従事する人々の職業形態や生活様式と関わるだけではなく、彼らを取り巻く環境に深く依存しているからである。橋本（2013）は生活環境に視点を置いた方言語彙へのアプローチを「生態学的(ecological)研究」と称して、その推進・展開の重要性を指摘している。

環境と結び付いた語彙の中で、特に、風、潮、波を指す語彙は、表現の多様性においても、数においても際立って豊富なように思われる。それは、漁業従事者にとってこれらの現象に注意を払うことが漁の実施に直接的に関与してくるからである。たとえば、石垣（1983）には 640 語余りの漁業に関連した語彙が収録されているが、その内、風、波、潮を指すのは約 110 語で、全体の 17%を占めている。吉岡（2003）は、石狩浜及び厚田浜を中心とした伝統的な漁撈・漁具用語を収録した優れた労作であるが、総語彙数 676 の中で、潮の名称等の自然現象語彙は 31 語収められている。興味深いことに、この事典には風に関係した語彙は一切ない[2]。

1977 年度（昭和 51 年度）に実施された『南茅部町の方言調査』（代表：北海道教育大学旭川分校　小野米一助教授（当時））に参加した川内谷繁三氏の論考が、報告書第 4 章「南茅部町の漁業語彙」の表題で掲載されている（小野米一（編）1977:147-160）。これは、椴法華村の北に隣接する南茅部町で 2 日間に渡って採録した漁業語彙の記録及び報告である。採録語彙は、「1 自然現象に関する語彙」と「2 漁撈に関する語彙」の二つに分類されており、風の方位、漁具、網の建て方等について手書きの図を挿入し、各語彙にかなり詳細な解説を付している。自然現象に関する語彙の中で潮は 7 語、波は 12 語、風は 15 語が挙げられている。先述したように、北と南にそれぞれ隣接する南茅部町と恵山町の方言は椴法華方言とほとんど差異はないと言われている。実際、三町村の漁師は、恵山岬沖を中心として東岸部沿岸での漁を営んでおり、漁獲される魚種も同じである。ただし、川内谷（1977）の記載語彙

が椴法華方言でも用いられているかどうかについては検証する必要があろう。

菊平和子（編）（1992）は全部で 25 ページの小著であるが、第 1 章を「気象に関することば」に割いている。ここには「風の方位の呼び名」15 語が収められているが、潮や波関連の語彙への言及はない。

橋本（2013:75-77）の「第 3 節 海事語彙」に波や潮流、風や天候、地形など漁業を取り巻く環境に関連した 14 語彙が記載されている。この内、風は 2 語、潮と波は 9 語である。

川内谷（1977）、菊平（1992）、橋本（2013）に共通して言及されていることがある。それは、風や潮、波に関わる語彙が「地形や方角など用いられる地域の地理的条件に依存している」という指摘である（橋本 2013:76）。

調査対象語彙の使用地域である渡島半島及び周辺地域の地図を参考までに掲げておく。

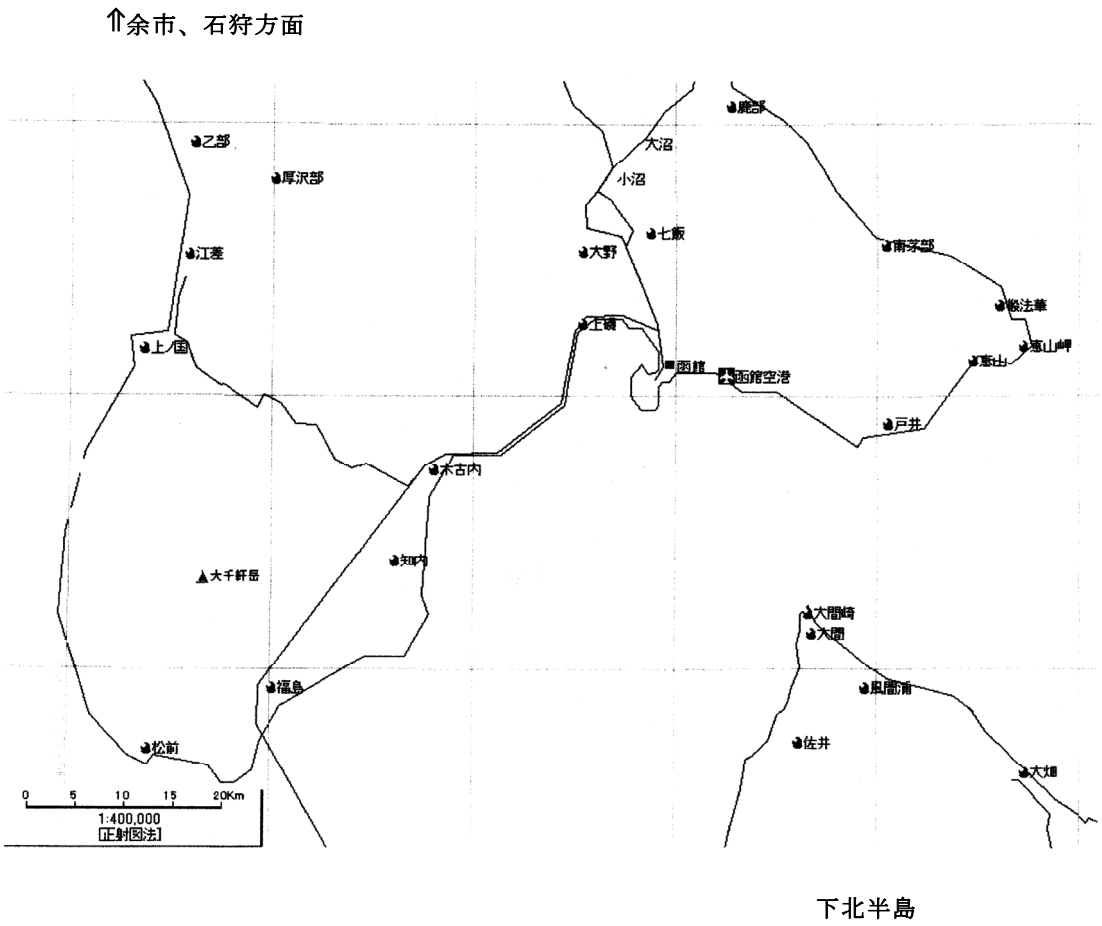

図１：渡島半島簡略地図

本稿は、2013 年夏に実施された椴法華村（現在、函館市）での聞き取り調査によって得られたデータを基にしている。調査の実態は、次の通りである。

○調査実施日：2013 年 8 月 28 日及び 29 日
○調査場所　：函館市富浦町調査協力者宅
○調査協力者：田中末廣氏(昭和 10 年生まれ；漁師)
　　田中美枝子氏(昭和 17 年生まれ；漁師)
○調査者　　：橋本邦彦・塩谷亨・島田武(いずれも室蘭工業大学教員)
○調査項目　：漁業関連方言語彙：風、潮・波、漁具等の名称

調査対象語彙は、石垣（1980, 1983）、橋本（2012, 2013）、橋本・島田・塩谷（2012）、橋本・島田（2013）から、椴法華村とその周辺で使用されていると考えられる語彙の中から、風、潮・波、漁具・漁法・魚種に関連したものを抽出した。また、吉岡（2003）を参照して、重複する語彙だけではなく、渡島半島西岸部、日本海沿岸部に特有と思われる語彙も限られた数であるが操作(manipulation)のために意図的に加えた。これらの語彙を、「風」、「潮・波」、「漁具・漁法・魚種」の三つの項目に分け、語彙調査票に掲げた。調査票の体裁は、次の通りである。

No.	語　　彙	使用の状況（該当数字に○を付けて下さい）	意　味　・　用　法　等	備考
1	アイ	1. 使う　2. 聞いたことがある　3. 使わない		
2	アイゲ	1. 使う　2. 聞いたことがある　3. 使わない		
3	アイシモカゼ	1. 使う　2. 聞いたことがある　3. 使わない		

表１：語彙調査票（一部抜粋）

調査の際には、調査協力者に直接調査票は見せないで、調査者が口頭で質問するようにした。必要と思われる場合には、地図などの資料を提示した。調査をする中で調査協力者から新たに聞き出した情報は、その都度「意味・用法等」欄や「備考」欄にメモした。具体的に提示し披露してくれた漁具等はデジタルビデオカメラに収録した。

当初準備した語彙総数は 120 語であったが、時間の制約と話の流れで、すべてについて調査することはできなかった。反対に、談話を聞いている間に予期しなかった情報が得られる場合が多々あった。そのような理由で、新たに得た語彙を加えると、最終的に、「風」関連語彙 32 語、「潮・波」関連語彙 29 語、「漁具・漁法・魚種」関連語彙 87 語の、総計 148 語についての調査結果を得るに至ったのである。

本稿は、従来の調査・研究で提出された風と潮・波に関係した語彙が、椴法華村で実際に使用されているかどうかを、地元の 70 歳代の漁師への聞き取り調査を通して検証することを主な目的としている。調査の過程で判明した新知見がある場合には、それについても触れ

ていきたい。

第 2 節では、風に関連した語彙の聞き取り調査の結果を提示し、いくつかの考察を付す。第 3 節では、潮と波に関わる語彙を取り上げる。第 4 節の結びでは、この調査の意義と今後の展望について述べたい。

2. 「風」を表す語彙

2.1. 風と方位に関する解説

橋本(2013:76)は、風や潮・波に関わる語彙が「地形や方角など用いられる地域の地理的条件に依存する」ことを述べている。とりわけ、風の呼称は、「風の吹いて来る方向、吹き方、波の立ち方を総合的に判断して決められる」（川内谷 1977:149）ので、地域によって独特の呼び名が付けられている可能性がある。菊平（1992:3）も「各地とも局地的に特に変わった風が吹くため、同じ方向から吹いて来る風についても地域によって多少ちがいがある」ことを指摘している。これを実証する例を、関口（1985:159-169）に収録された「アイノカゼ」に見ることができる。この語彙は北海道から山口県にかけて広く分布するが、[北風]、[北～東風]、[北～北東風]、[北東風]、[北東～東風]、[東北東風]、[東風]、[南東風]、[南南東風]、[南風]、[南西風]、[西風]、[北西風]、[北西～北風]、[北北西風]と 15 の異なる方角から吹く風を指し、北→東→南→西→北と四つの主要な方位を時計回りに一周することになる。

伝統的に方位に基づく風の呼称は一般的な目安としては有効であるものの、方言語彙という視点からは、使用地域の地理的条件や地元漁師の関心事、たとえば、当該の漁に影響を及ぼすか否か等を勘案したきめ細かな検証を必要とする。

参考に、吹く方向から捉えた共通性の高い風と方位の名称を引用する。

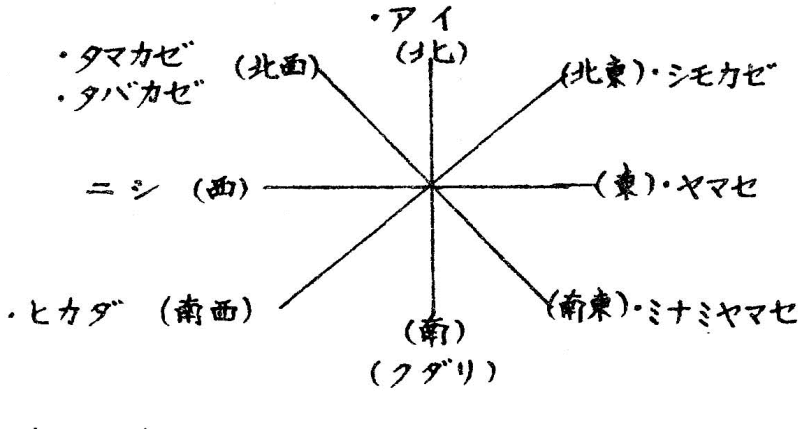

図 2：風の方位（菊平(1992:3)から引用）

本調査では 32 語の「風」関連語彙について聞き取りをした。これらの中には、渡島半島西岸部を始めとする道内の他の地域で採録された語彙も含まれている。2.2 節では「使う」、2.3 節では「聞いたことがある」、2.4 節では「使わない」と回答した語彙をそれぞれ扱う。2.5 節は調査結果から判明した事項について所見を述べる。

2.2.　「使う」回答の語彙

全 32 語の内 13 語（41%）がこれに当たる。なお、各語彙の表記法は、次の通りである（以下に掲載する調査語彙はすべてこの表記法に従う）。

1) 語彙はアイウエオ順に掲げて、カタカナ表記とする。
2) [　　]で品詞を記す。
3) コロン(:)の後に意味を記す。意味が複数ある場合には、①・・・、②・・・のように丸付き数字の後に各々の意味を記す。
4) <　　>で語彙の採録地を記す。
5) ☛で他の文献からの関連箇所の記述を引用して記す。
6) ＃で調査協力者の田中氏ご夫妻から得られた事項を記す。
7) ＊で著者のコメントを記す。

(1) アイスィモカゼ[名詞]：①東風＜知内町小谷石＞；②北北東風＜松前町＞。
☛1 石垣（1983:17）アイシモカゼ：アイ（北）とシモ（北東）の中間から吹く風で、風向きは地域により異なる。
☛2 関口（1985:155）①東北東風＜青森県下北郡東通村岩屋＞；②北西風＜青森県西津軽郡木造町越水＞
＃ 椴法華では陸側から吹く風を「アイ」と呼ぶ。この風が吹くと波が高い。

(2) アイタバカゼ[名詞]：①北北西風；②北西風；③北北東風。
＊アイ（北）を基点として、西寄りから東寄りの範囲で吹く風。
☛ 関口（1985:156-157）①北風：夏日本海の沖合より吹いてくる風＜鳥取県西伯地方＞；②北西風：冬に多い風で、海上はしけが多く、大型船でも休漁、吹けば 12 月中旬～2 月末には吹雪の日が多く、海難家屋被害を生ずる＜新潟県北蒲原郡中条町西栄＞。
＊地域によって吹く方角だけではなく、季節も異なる。

(3) カミカゼ[名詞]：北西風。
☛1 石垣（1983:94）奥尻では 1 月 1 日にカミカゼが吹くと今年 1 年は漁があるという言い伝えがある。
☛2 関口（1985:317-319）①北風＜徳島県阿南市＞;②南風＜福井県南条郡河野村＞；③西風＜青森県大間町＞など。
＊全国で広く使用され、地域により方位が異なる。

(4) カワセ[名詞]：＃1 海から陸に吹く風。
カワセル[動詞]：＃2 海から陸に向かって風が吹く。
☛1 石垣（1983:99）カワセル：風向きが変わる。「この風は東にカワセテも、西にカワセテも、天気はよくならない」＜戸井町＞
＊本調査で判明した上記の意味に関する言及はない。

☛2 関口（1985:325）①南西風、台風通過後の風、雨と風を混じえて嵐となり危険＜新潟県佐渡＞；②北西風、秋冬に多い風＜南茅部町＞。

＃ 漁によい風で、この風が吹くと天候がよくなる。

＊関口①とは正反対の評価である。

(5) ＃ ケッカイ[名詞]：風の向きが反対になる境界線。

「恵山岬にケッカイがあり、ボンデ（海上標識）を投げる」＜田中美枝子氏の談話＞。

＊1 この語は、従来の方言辞典には掲載されていない。ケッカイは「結界」に由来するのかもしれない。『国語大辞典』（1986:898）によると、この語は元来、仏教用語で、「仏道修業に障害のないように、一定の区域を定めて制限を加えること」の意味を持つ。ここから、反対の風向き同士の、適用領域の接する境界線を指すようになったと推察できる。

＊2 恵山岬という具体的な地形と結び付いた語である。

(6) シモカゼ[名詞]：①東風；②東北東風；③北風。

☛ 関口（1985:503-506）北海道の日本海側、青森県、秋田県、新潟県、福井県では北寄りの風、北海道の太平洋側、茨城県、千葉県では東風なのに対し、鹿児島県、長崎県では南寄りの風である。

＃ シモ（北東）から風が吹くと、海は時化る。

(7) シモカゼヤマセ[名詞]：北寄りの東風で、主に冬から春にかけて吹く。

＊ 石垣（1983:164）は「海岸方言」、 関口（1985:506）は採録地として北海道渡島半島西岸部の松前町、寿都町、江差町、乙部町等のみ記載している。どちらも渡島半島東岸部地域への具体的な言及はない。

(8) シモヤマセ[名詞]：①東北東風＜松前町＞；②北風＜青森県津軽郡＞；③北東風＜留萌市、余市町、新潟県佐渡＞；④北北東風＜豊頃町大津＞。

Cf. 石垣（1983:164）

☛ 関口（1985:516-518）上記の他に、①東風＜羅臼町＞；②東南東風＜青森県下北郡東通村＞；③南東風＜湧別町、青森県むつ市＞が挙げられている。

(9) シカタカゼ[名詞]：①南西風で、8 月から翌年 4 月頃まで吹く強風。単に、シカダ、ヒカダとも言う。②南西から西北西にかけて吹く風＜知内町小谷石＞。

☛1 石垣（1983:272）ヒカタカゼ「一番恐ろしい風はシカダだ。」＜尻岸内町＞

☛2 関口（1985:492-497）北海道太平洋側・日本海側から青森県、新潟県、富山県、石川県等で使用されている。

☛3 『尻岸内町史』（1968:76）ヒカタ：南西から吹きつける風で、海は大時化になる。

☛4 『恵山町史』（2007:70）①「たちがわせのシカタ雲」：上空を速く走るシカタ雲は、風が南から南西に変わり、急に強くなる。②「シカダ、ニシンかわせば雨」：南西風が西に変わってくれれば雨である。③「シカダのたつがわせ」：春の晴れた凪の日、恵山に雲がかかり、上空には雲がないのにパラパラ雨が降ってきて海鳴りが聞

こえ、南西方向の海が黒く見える。このような時、突然、南西の突風が吹く。

☛5 『南茅部町史（上）』(1992:799) ヒカタの風は、夕立になればやむと言われている。

＃ 南から吹く風は恐ろしい。

(10) ホンヤマセ[名詞]：東風。

☛ 石垣（1983:305）北東から南東方向までの風をヤマセと言う人が多いので、真東からの風を「本当のヤマセ」の意味で使う＜知内町小谷石＞。

＊ 関口（1985）には記載がないので、北海道に特有の言葉だと考えられる。

(11) ミナミクダリ[名詞]：南東風＜函館市＞。

Cf. 石垣（1983:318）

☛1 関口（1985:866）①南南東風＜増毛町、福島町、青森県下北郡東通村＞；②南風＜青森県下北郡風間浦村＞。

☛2 『尻岸内町史』(1968:76) クダリ：夏の季節風で、4 月～10 月頃まで続く温暖で湿気を含んだ軟風。南南西寄りの風で、海は比較的穏やかである。

＊ クダリは方位でいう南である。ミナミとクダリという同義語から成る冗長な名称。

(12) ミナミヤマセ[名詞]：①南南東風＜道南各地＞；②東風＜知内町小谷石＞。

Cf. 石垣（1983:318）

☛1 関口（1985:869-872）寿都町、松前町、泊村、江差町など渡島半島西岸部、羽幌町、厚内町、余市町、浦河町、えりも町、釧路市など道内各地、青森県、新潟県佐渡等で用いられる。

＊東南東風、南東風、南風をも含んでいるが、東風への言及はない。

☛2 『恵山町史』(2007:70)「春のヤマセと雨と霧」：4 月に吹く南東風は雨や霧となりやすい。

☛3 『南茅部町史（上）』(1992:799) 陸が吹かずに沖が強く吹く。南風が吹くと南茅部町古部沖から恵山町磯谷へ（船が）流される。

(13) ヤマセ[名詞]：①東風＜函館市＞；②南東風＜知内町小谷石＞；③北東風＜函館市＞。

☛1 石垣（1983:337）本来、山を背にして吹く風で、日本海側では東寄りの風のこと。海は時化る。

☛2 『南茅部町史（上）』(1992:798) 曇りか雨、時に大嵐になる。出漁を見合わせる。

☛3 『尻岸内町史』(1968:76) 東から吹く風。冬のヤマセは暖かく、夏のヤマセは冷たく感じる。

☛4 『海と船と漁労の記録～六カ所村泊地区』(2002:2) 東からの風。春から初夏にかけて吹く。

☛5 関口（1985:900-913）地域によって東寄りの風とは限らない。たとえば、北風＜秋田県本荘市＞、南風＜鳥取県岩美郡岩美町＞、西風＜福井県小浜市＞など。

＊ 渡島半島東岸部の下海岸地域は、西岸部同様に東風を指し、頭痛や腰痛を引き起こす「頭痛風」と呼ばれる。6 月～7 月に山から海に向かって（山を背にして）吹き下ろし、不漁となる。

2.3. 「聞いたことがある」回答の語彙

全部で 3 語あった。

(14) アガヤマセ[名詞]：南東風。夏、この風が吹くと時化が長く続き、海岸近くの木の葉が赤く枯れる。

☛1 石垣（1983:22）「このアガヤマセってのは、だいたいまあ 5 月頃から吹くんだ」＜松前町白神＞。

☛2 類家（2007:30-31）ボタヤマセ（アカヤマセとも言う）：天気はよいが、風が 10～15 日も続き、沖へ出られないことが多い。なお、「ボタ」とは雲のことで、白神付近では「ボタがかかると東風になり、海がしける」と言われている。

☛3 関口（1985:178）昭和 45 年の『民族調査報告書』を典拠に、北海道渡島支庁松前町松城を採録地としている。

(15) ドヨーアイ[名詞]：夏の土用の期間中に吹く風。土用＋アイ（北風）から成る。

☛1 石垣（1983:235）海岸部方言。

☛2 関口（1985:597）＊この語は掲載されていないが、同じタイプの風の呼称として「ドヨウカゼ：北東風」＜香川県津田町＞が載っている。

☛3 『椴法華村史』（1989:6）6 月～9 月の椴法華では、南‐南東の風が強い。
＊ドヨーアイとは風向きが反対である。

(16) ミナミシカタ[名詞]：南西風。海は大時化になる。

☛1 石垣（1983:318）ミナミヒカタ＜知内町小谷石＞

☛2 関口（1985:869）①南東風の強い風＜岩手県田老町＞；②南南西風＜増毛町＞。

＊ 椴法華村、恵山町、南茅部町の下海岸地域では「シカタ」は用いるが、それ以上の細かい区分はしていないようである。Cf. (9)

2.4. 「使わない」回答の語彙

調査対象語彙 32 語中半数の 16 語が該当する。

(17) アイゲ[名詞]：①北風模様＜奥尻＞；②北東風＜知内町小谷石＞

☛1 石垣（1983:317）「アイゲだすけ寒いんだ」＜奥尻＞。

☛2 関口（1985:154）①アイケ：北東風＜石川県江沼郡＞；②アイゲ：北風＜石狩町、奥尻町、豊頃町大津＞。

(18) アイタマカゼ[名詞]：①北西風；②北北西風；③北東風；④北風。

☛1 石垣（1983:317）余市町ではニシンの群来る風と言われている。

☛2 『尻岸内町史』（1968:76）;『恵山町史』（2007:69）

①アイノカゼ：北東から吹く風。風の強さはあまり感ぜず、沖合は大うねりとなる。
＊アイタマカゼ③と同じ。

②タマカゼ：冬の季節風で、10 月～12 月頃に吹く寒冷な風速の大きい北西風。
「タマカゼ 6 時間」：漁業者に恐れられる風。突風となって漁船を転覆させるも

のもある。

＊アイタマカゼ①と同じ。

☛3 菊平（1992:3）タマカゼ～タバカゼ：北西風。

＊アイタマカゼ①と同じ。

☛4 『海と船と漁労の記録～六カ所村泊地区～』（2002:2）アイノカゼ：北から吹いてくる風。沖合から風が来る格好になるので、波が大きくなり、漁師にとって危険な風とされる。

☛5 関口（1985:157-158）東北、北海道の他に、新潟県村上市でも使用される。

(19) イレカゼ[名詞]：南東の風＜豊頃町大津＞。

Cf. 石垣（1983:45-46）

☛ 関口（1985:263-264）北海道だけではなく、島根県隠岐郡、和歌山県日高郡南部町、福岡県糸島郡前原町などでも使用されている。地域によって、北風、南東風、南風、南西風、西風というように方向が異なる。特に興味深い例として、長崎県西彼杵郡外海町神浦江川では、「方向によらない風。晴天、海より吹き込む昼の風」との記述がある。

＃ 椴法華村では「オキカゼ」と言う。

＊方向に関係なく沖から吹く風という意味。長崎県の場合と同じ。

(20) エサナ[名詞]：①南東風；②東風。

☛1 関口（1985:276）イサナのなまった言葉。

＊岩手県から宮崎県に渡る多くの地域で用いられているが、北海道に関する言及はない。

☛2 『恵山町史』（2007:70）イサナ：南東風のこと。＊エサナ①と同じ。

(21) キデカワセ[名詞]：急激な風の変化。

☛1 石垣（1983:106）「今日あたりキデカワセあるがもしれないから気つけれよ」＜江差町、上ノ国町＞。

☛2 菊平（1992:4）「風がカワセル」：風が変わること。

＃ 椴法華村では「カゼガワヤ」と言う。

＊ 関口（1985）には一切記載がない。

(22) シカマ[名詞]：北西風。

☛1 石垣（1983:154）海岸方言。

☛2 関口（1985:497）①北東風＜岩手県大船渡市赤崎＞：秋～冬に多く強い寒風、不漁風；②北西風＜岩手県釜石市＞。

＊主に、岩手県で使用されている。

＊ 北西風は、下海岸地域ではタマカゼ、タバカゼと呼称される。

☛3 『恵山町史』（2007:71）「タマカゼ、ニシタマカゼは凪」：北西風や西風は少々吹いても凪である。Cf. 菊平（1992:3）

＊岩手県大船渡市赤崎の場合と正反対の天候である。

(23) シケェシ[名詞]：反対方向の風。

☛ 石垣（1983:155）「この風のシケェシ来るぞ」＜戸井町＞。

＊ 他の文献に記載なし。

(24) シマギ[名詞]：つむじ風。

☛ 石垣（1983:163）「ひどいシマギだな。危ないから船を出すな」＜南茅部町＞。

＊ 他の文献に記載なし。

(25) シモゲ[名詞]：①北風；②北北東風；③北東から吹く風がゆるんで凪になること＜南茅部町＞；④シモ（東）から吹く風の総称＜松前町＞。

☛1 石垣（1983:164）海岸部方言。

☛2 川内谷（1997:149）鹿部方面から吹く風がゆるんで凪になること＜南茅部町＞。

☛3 関口（1985:507-508）シモカゼと同じ。①北風＜青森県北津軽郡＞；②東風＜新潟県頚城郡＞；③南西風＜高知県宿毛市小筑紫町栄喜＞；7 月～9 月に多い風、沖は凪。

(26) ナガセ[名詞]：南南西風。3 月に吹く暖かで雪を溶かす風＜知内町・小谷石＞。

＊ 石垣（1983:240）以外の文献には挙がっていない。

(27) ニシタバカゼ～ニシタマカゼ[名詞]：①西北西風＜寿都町、乙部町、奥尻町、松前町、豊頃町大津＞；②北西風＜余市町、南茅部町＞；③北北西風＜青森県下北郡＞。

☛1 石垣（1983:248）①ニシタバカゼ：西北西風、北西風、<u>西風</u>；②ニシタマカゼ：西北西風、北西風、<u>北北西風</u>。

＊①と②を別項で挙げているが、下線部が違っている。

☛2 関口（1985:683-684）①ニシタバカゼ：北西風＜青森県西津軽郡＞；②ニシタマカゼ：<u>西南西風</u>＜奥尻町青苗＞、<u>西北西風</u>＜青森県青森市＞、北西風＜青森県東津軽郡平館村今津＞；2 月～4 月の寒くて強い風、時化の風で危険。

＊①と②を別項で挙げているが、下線部が違っている。

＃ 椴法華村では北～北西の風を指す呼称に「タバカゼ」を用い、「ニシ」を加えることはない。

(28) マイマイカゼ[名詞]：つむじ風。

☛ 石垣（1983:306）内陸部方言。

＊関連方言として、愛知県、近畿地方、中国地方、四国地方が挙げられているが、関口（1985）にはこの語自体への言及はない。

(29) マガダ[名詞]：①風；②北西風；③北風。

☛1 石垣（1983:306）海岸部方言。

☛2 関口（1985:795-798）①マカタ：北風、北東風、南西風、西風、西北西風、北西風、北北西風；②マカタカゼ：北風；③マカダ：北風、東北東風、南風、北西風；④マカダナライ：西北西風；⑤マガダ：北西風。

＊採録地は、青森県、岩手県、宮城県、福島県、千葉県、茨城県、三重県といったように、東北地方の太平洋側を中心に比較的広い地域に渡るが、北海道は含まれて

いない。

(30) マクダリ[名詞]：南風。真南からの下り風。＜知内町小谷石＞

Cf. 石垣（1983:307）

☛1 『恵山町史』（2007:70）「クダリと手間取り日一杯」：日雇い漁夫は暮れまで一日一杯働かされ、夜休む。南風も夕暮れまで強く吹くが、夜になると穏やかになる。

☛2 関口（1985:288）①北東風＜兵庫県北淡町＞；②南東風＜富山県氷見市＞；③南風＜新潟県佐渡＞；④南西風＜新潟県西頸城郡能生町＞；⑤京都の方向から吹いてくる風；⑥強く暖かい風で、半日くらい吹き、火災の危険が大きい。漁は少ない。

＊兵庫県と新潟県、富山県では吹いてくる方向が反対である。

(31) モシリカクシ[名詞]：西風＜斜里町＞。

Cf. 石垣（1983:328）

＃ 「アイヌ語ではないか」＜田中末廣氏談＞。

☛ 萱野（1996:434）、大須賀（2012:162）：モシ゚[mosir]は「静かな大地、国、国土」を表す。関連語に、モシ゚チュプカ[mosir-cup-ka]「東の方」、モシ゚チュプポク[mosir-cup-pok]「西の方」などがある。

＊ モシリ＜アイヌ語＞＋カクシ＜和語＞の合成語で、「西の方を覆うような風」を意味するのかもしれない。

(32) ヨイチ[名詞]：①11 月頃、夜 10 時から 11 時頃急に吹く突風のこと。南風かシカダ（南西風）で、強いが長くは吹かない。Cf. 石垣（1983:344）；②初冬の夜半に吹き出してくる風で、突風を伴うが、朝には凪る。Cf. 『恵山町史』（2007:70）。

☛1 『恵山町史』（2007:70）①「日暮れの暖風ヨイチに注意」：日暮れの生暖かい南東から南南東の風は、急に北西の突風が吹くから気をつけなければならない。

②「ヨイチにくるぞ」：無風の穏やかな曇り空の時、突然、南南西の強い風がみぞれを伴って吹き始める恐ろしい風を言う。

☛2 関口（1985:928）ヨイチ（坊主）：南東～南西風＜青森県下北郡川内町＞。11 月～12 月と 2 月～3 月の夜半突然強く吹く風。余市という坊主を海上で殺した祟りで、夜半に天候が急変して風が吹くという言い伝えからできた呼称。

2.5. 「風」関連語彙についてのいくつかの所見

以上、調査協力者により「使う」、「聞いたことがある」、「使わない」と回答された語彙を主要な文献から引用した関連事項と合わせてまとめたのであるが、ここから判断できるいくつかの所見を、椴法華方言を中心に据えて、以下で述べたい。

1) 「使う」回答の語彙の内かなりのものは、北海道の諸地域だけではなく本州でもかなり分布している：(1)アイスィモカゼ、(2)アイタバカゼ、(3)カミカゼ、(6)シモカゼ、(8)シモヤマセ、(9)シカタカゼ、(11)ミナミクダリ、(12)ミナミヤマセ、(13)ヤマセ。

注意すべきは、呼称が同じでも、地域によって吹いて来る方角や吹く季節が異なる場合があるということである。たとえば、(2)アイタバカゼは夏に吹く北風を指す場合も、

冬に吹く北西風を呼ぶ場合もある。また、(3)カミカゼは地域により、北風、南風、西風と方角に大きな異なりを示している。

2) 椴法華方言では「アイ」を「北」という方位からではなく、「陸側から吹く風」のように地理上の相対的な位置関係から捉えているように見える。陸から海に向かって吹く風として一般化することで、(1)アイスィモカゼ、(2)アイタバカゼは別にして、あまり細かい分類はせずに、すべてを「アイノカゼ」と捉えているのではないだろうか。(17)アイゲ、(18)アイタマカゼを使用しない理由もこの点から説明できるように思われる。
3) (7)シモカゼヤマセ、(8)シモヤマセ、(10)ホンヤマセ、(12)ミナミヤマセ、(13)ヤマセも全国的に使用域があり、ヤマセ（東）を基点に北から南と比較的広い方位をカバーしている。椴法華村を含む渡島半島東岸部及び西岸部では、2)の「アイ」同様に、「山から海へ向かって吹き降ろす風」として地理的条件に即した捉え方をしている。
4) (4)カワセ、カワセルの意味は、椴法華方言に特有である。石垣（1983:99）には「風向きの変化」という一般的な意味しかないし、関口（1985:325）の風に対する評価の解説とも真っ向から対立する。椴法華村では、陸⇒海：漁にとって負の風の吹く方向 vs.海⇒陸：漁にとって正の風の吹く方向のような対立軸で風を認識しているのである。
5) 方位を考慮に入れないものにオキカゼ(（19)で記載）がある。これも沖＝海側から陸に向かって吹く風全般を指す名称である。
6) 風への関心は漁にとって適切か不適切かという考え方に結び付いている。とりわけ、漁にとって危険な風、不向きな風の名称は数が多く、また細かく分類されている。
たとえば、「使う」回答の中で漁にとって負の風は、13 語中(1)、(2)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)、(12)、(13)の 9 語もある。
7) 具体的な地名と結び付いている名称がある：(5)の恵山岬、(12)の古部と磯谷、(25)鹿部。
8) 椴法華村と他の地域で同じ風を指すのに異なる名称を使う場合がある：(19)イレカゼ～オキカゼ、(21)キデカワセ～カゼガワヤ、(26)シカマ～タマカゼ/タバカゼ。
9) 下海岸地域を構成する南茅部町や尻岸内町、恵山町で用いられているのに、椴法華村では使用が確認されない語彙がある：(18)エサナ～イサナ、(25)シモゲ、(32)ヨイチ。
10) 渡島半島東岸部では使用されない、西岸部にのみ使用域をもつ語彙がある（ただし、本州は除く）：(14)アガヤマセ、(16)ミナミシカタ、(17)アイゲ、(21)キデカワセ、(23)シケェシ、(26)ナガセ、(30)マクダリ。

『椴法華村史』（1989:6）は年間を通して椴法華村に吹く風の方位を記述しているが、これに「使う」回答の語彙を当てはめると、次のようになる。

1 月～2 月：北西‐西の季節風が吹く。⇒アイタバカゼ、カミカゼ
3 月～4 月：大陸の高気圧は移動性となって東に進む。北西‐西の季節風は次第に弱くなり、南東の風がやや多く吹き始める。⇒オキカゼ
5 月　　：南風が多くなる。

6 月～9 月：南 - 南東の風が強い。⇒シカタカゼ、ミナミクダリ、ミナミヤマセ、オキカゼ

11 月～12 月：北風が吹く。⇒アイノカゼ

●年間を通じて、東南東 - 東 - 北東の風は少ない。これらの風が吹き始める場合は、気圧の谷が近づいてくることが多い。⇒アイスィモカゼ、シモカゼ、シモカゼヤマセ、シモヤマセ、ホンヤマセ、ヤマセ

これ以外の方位から吹く風はないか、あったとしても漁に関わるものではないと考えられる。地元の漁師にとって、関心の埒外にある風の名称は知る必要のないものなのである。

3. 「潮」・「波」を表す語彙

潮及び波に関連する語彙は、全部で 29 語を調査した。

3.1 「使う」回答の語彙

調査協力者の田中末廣・美枝子夫妻が「使う」と回答したのは 20 語（約 69%）である。

(33) アイマワリ[名詞]：ヤマセが終わった後に海岸に押し寄せる大きなうねり。秋口に多い。

☛ 石垣（1983:18)「ほれ、アイマワリで転覆した船あったでしょう」＜知内町、椴法華村＞。

(34) ウェソ[名詞]：上層の潮の流れ[3]。

＃ 「ムエンノシマまでホッケが来たが、ウェソでこっちには来ない。」

＊ 川内谷（1977)、石垣（1983)、吉岡（2003）にこの語は採録されていない。

(35) エサンソ～エサンゾ[名詞]：鹿部方面（北西）から恵山方面（南東）に向かって流れる潮流。

☛1 石垣（1983:55）エサンジョ＜南茅部町＞。

☛2 『椴法華村史』(1989:569）恵山汐：内浦湾より茅部郡に沿い、東南海側に流れる潮流で、底流と皮流とも同一方向に流れる。

☛3 川内谷（1977:147）エサンジョ（恵山潮)。

＊1 名称が潮流の起点ではなく着点の地名と結び付いている。

＊2 田中氏は、単に恵山方向に流れる潮とのみ解釈し、☛2 の記述にあるような「底流と皮流とも同一方向に流れる」とは考えていないように思われる[4]。

(36) エサンノウチコミソ[名詞]：沖合より沿岸をかすめて東南に流れる潮流。この潮の勢いのある時には豊漁と言われる。

☛ 『椴法華村史』(1989:569）恵山の打ち込汐。

(37) オーソ[名詞]：津軽海峡の中央部で年中、日本海から太平洋に向かって流れている潮。

☛1 石垣（1983:61）オーショ。

☛2 吉岡（2003:18）オーショ：石狩浜や厚田浜では四季最大の満潮時を言う。

＊ 使用地域に依存して指す対象を異にする。

(38) カヤベソ～カヤベゾ[名詞]：恵山方面（東南）から鹿部方面（北西）へ向かって流れる潮流。

☛1 『椴法華村史』（1989:569）茅部汐：東南外海より内浦湾（噴火湾）に入る潮流で、底流と皮流は全くその方向を異にする。

☛2 川内谷（1977:147）カヤベショ：「カヤベショになれば、さかなつっこんでくる」＜南茅部町＞。

＊ (35)エサンソとは逆方向に流れる潮。田中氏は、単に南茅部方向に流れる潮とのみ解釈し、☛1 の記述にあるような「底流と皮流は全くその方向を異にする」とは考えていないように思われる[5]。

＃ 豊漁を期待させる潮。

(39) シタソ[名詞]：下層の潮の流れ。

＊ (34)ウエソ同様、川内谷（1977）、石垣（1983）、吉岡（2003）にこの語は採録されていない。

(40) ソ[名詞]：潮流。

☛1 石垣（1983:163）「ショのぶつかり合ってるところに魚が集まる」＜尻岸内町＞。

☛2 吉岡（2003:61）シヨ：一般的な潮流現象。

＊ 下海岸地域を含む道南部で広く用いられる。

(41) ソアンバイ[名詞]：潮流の具合[6]。

☛1 （石垣 1980, 1983:168）ショアンベ：「ショアンベ悪ければ 5 時間もかかる」＜椴法華村＞。

☛2 吉岡（2003:61）シヨアンベ。

＃ 上の層と下の層の流れが違うことを指して言う。流れが速いと錘が下へ沈み、ごみがかかるので、漁に支障をきたす。

(42) ソガワリ[名詞]：潮流が変わること。また、その場所や時刻。

☛1 石垣（1983:169）ショガワリ。

☛2 吉岡（2003:61）シヨガワリ。

(43) ソコミ[名詞]：満潮になること。

☛ 吉岡（2003:61）シヨコミ：関連方言が宮崎地方にあり、この地方からの移住者によって伝えられたと断定している。

(44) ソコム[動詞]：潮が満ちる。

☛1 石垣（1983:169）ショコム。

☛2 吉岡（2003:62）シヨコム。

(45) ソシル[動詞]：干潮になる。

☛　石垣（1983:169）ショシル。

(46) ソダテ[名詞]：潮と潮の流れがぶつかり合って盛り上がること。

☛1 石垣（1983:170）ショダテ～シオノオシダテ。

☛2 吉岡（2003:62）シヨダテ：石狩川河口では川の流れと潮の流れのぶつかり合って不意に大波になる様を言う。

(47) ソダルミ[名詞]：ソガワリのときに潮がゆるむこと。

☛1 石垣（1983:170）、川内谷（1977:148）ショダルミ。

☛2 吉岡（2003:62）シヨダルミ。

＃　漁ではよい条件となる状態である。

(48) ソナミ[名詞]：潮風が吹き付けて起こる波。

☛　石垣（1983:153）＜知内町小谷石＞。

(49) ツッコミソ[名詞]：沖合から陸に向かって流れる潮。満潮時に起きる。強い流れにはならない。

☛1 石垣（1983:213）、川内谷（1977:147）ツッコミショ。

☛2 吉岡（2003:77）ツッコミシヨ。

(50) デソ[名詞]：陸側から沖に向かって流れる潮。

☛　石垣（1983:219）、川内谷（1977:147）デショ。

＊ 石垣（1983:219）の採録地は渡島半島西岸部の知内町小谷石及び余市町である。ただし、余市町で使用される語彙を比較的多く採録している吉岡（2003）にこの語は見当たらない。一方、川内谷（1977:147）の採録地は東岸部の南茅部町である。

(51) トロナギ[名詞]：波のない静かな状態。

☛　石垣（1983:236）「いつもこんなトロナギばかりでないよ」＜函館市＞。

(52) ハライソ[名詞]：陸から沖への出し潮。干潮になる時の潮の流れの状態。潮ができ、その瀬と瀬の間から出て行く潮の流れ。波が高くなるほど、流れが速くなる。

☛1 石垣（1983:268）ハライシオ。

☛2 吉岡（2003:105）ハライショ。

3.2.　「聞いたことがある」回答の語彙

1 語のみである。

(53)　ウチコミソ[名詞]：上潮と下潮のぶつかり合う所。

☛　吉岡（2003:15）ウチコミシヨ：石狩湾では石狩潮（クダリシヨ（下り潮））と浜益潮（アイシヨ（北潮））のぶつかり合うところがあるが、石狩川の流れ（淡水は軽い）によってアガリシヨ（上がり潮）が走り、境目がわからなくなることがある。春の石狩川の増水期には、上水（川水）が厚田沖まで広がることがある。

＊ 川内谷（1977:148）にある「ショザカイ：上潮と下潮のぶつかり合う所」＜南茅部町＞が同じ現象を表している。

3.3. 「使わない」回答の語彙

「潮」関連語彙 5 語、「波」関連語彙 3 語の計 8 語がこれに当たる。

(54) アイソ[名詞]：北から南に強く流れる潮。ニシンが入り、網を起こしやすい。

☛1 石垣（1983:17）アイショ：ノボリショとも言う＜浜益村＞。

☛2 吉岡（2003:1）アイショ：石狩湾ではアイノカゼの吹く期間（春から夏）によく、北方向から南西方向に、風の吹く方向と同じように流れる潮のこと。一般的には、ノボリショ（上がり潮）とも言う。

＊ 椴法華村では、これを(35)エサンソと呼んでいる。

(55) ウラソ[名詞]：岬の陰の方に起こる潮。

☛1 石垣（1983:52）ウラジョ＜松前町江良＞。

☛2 吉岡（2003:16）ウラジョ：厚田村濃昼（ごきびる）海岸周辺の岬などで起こる巻潮のこと。石狩浜周辺では見られないが、石狩湾新港の北防波堤周辺では、急流にはならないが発生している。

(56) オリ[名詞]: 沖から寄せて来る波が海岸近くなって盛り上がって一気に崩れる様を言う。

☛ 石垣（1980:68, 1983:73）「ぐっと波のオリを見てきたの」＜椴法華村＞。

＊ 採録地が椴法華村であるにもかかわらず、私たちの調査協力者は聞いたこともないし、使わないと回答している。吉岡（2003）には掲載されていない。

(57) カミソ[名詞]：カミ（南）から北に向かう潮。⇔(54)アイソ。

☛1 石垣（1983:94）カミシオ。

☛2 類家（2007:31）カミシオ（上潮）：福島町吉岡の方から来る潮で、東から南にまわり、西に向かって流れて行く。松前町白神を通って、荒谷、福山方面へ流れ去る。

＃ 椴法華村では、これを専ら(38)カヤベソと呼ぶ。⇔(35)エサンソ。

(58) シカダナミ[名詞]：風がおさまってから、短時間押し寄せる高波。

Cf. 石垣（1983:153）。

＃ 椴法華村では、同じ波をサンカクナミと言う。

(59) シモカゼナミ[名詞]：陸に真正面から押し寄せる波＜南茅部町＞。

Cf. 石垣（1983:164）。

＃ 椴法華村では、同じ波のことをオギカゼナミと呼ぶ。

Cf. 石垣（1983:63）オキカゼマワリ：大時化＜南茅部町＞。

(60) シモソ[名詞]：下（北方向）から流れて来る潮。

☛1 石垣（1983:164）シモシオ：日本海側で用いる。

☛2 類家（2007:31）シモシオ（下潮）：松前町江良・赤神の方から来る潮で、西

から南にまわり、東に向かって流れて行く。白神の沖を通って福島町吉岡へ流れ去る。

(61) フタソ[名詞]：海底部と海面部の潮流の方向が違う潮。

☛1 石垣（1983:283）フタショ

☛2 吉岡（2003:110）フタショ：二重潮のこと。海底部と海面部の潮流の方向が違う瀬の流れを言う。湾口、河口域、海峡、潮境域に発生する。

＊ 椴法華村では、上層＝エサンソと下層＝カヤベソと具体的な潮流名で呼称する。

＃ 潮が拮抗して流れないので、漁には不向きである。

3.4 「潮」・「波」関連語彙についてのいくつかの所見

以上、調査協力者により「使う」、「聞いたことがある」、「使わない」と回答された語彙を主要な文献から引用した関連事項と合わせてまとめたのであるが、ここから判断できるいくつかの所見を、2 節で展開したのと同様に、椴法華方言を中心に据えて列挙していくことにする。

1) 「使う」語彙では、潮の流れや方向から命名されたもの、例えば(54)アイソ、(57)カミソ、(60)シモソではなく、具体的な地名と結び付いた名称が比較的数多く見受けられる。(35)エサンソ～エサンゾ、(36)エサンノウチコミソ、(36)カヤベソ～カヤベゾ。これらは、当然、椴法華村を中心とした渡島半島東岸部に特有の語彙ということになる。

2) 漁にとって好条件であるか悪条件であるかに関わる潮流現象を指す語彙が散見される。(34)ウェソ、(36)エサンノウチコミソ、(38)カヤベソ～カヤベゾ、(41)ソアンバイ、(47)ソダルミ、(61)フタソ。

3) 使用される地域によって、同じ形の語彙でも内容の異なるものが存在する。以下の語彙はすべて渡島半島沿岸部と石狩浜・厚田浜では指示内容を異にしている。(37)オーソ、(46)ソダテ、(53)ウチコミソ、(55)ウラソ。

4) 渡島半島東岸部に位置する隣接地域でも、椴法華村と他町村では名称の違うものがある。(58)シカダナミ～サンカクナミ（椴法華村）、(59)シモカゼナミ～オキカゼナミ（椴法華村）。

5) 「使わない」回答の多くの語彙は渡島半島西岸部を含む日本海側で用いられるものと考えられる。(54)アイソ、(55)ウラソ、(57)カミソ、(60)シモソ、(61)フタソ。

6) 石垣（1980）『北海道（昭和 55 年度）各地方言収集緊急調査文字化原稿　椴法華村』の聞き取り調査では使われていたのに、本調査では「使わない」回答を与えられた語彙、(56)オリがある。石垣の主要な調査協力者は、明治 34 年生まれと大正 9 年生まれの漁師であった。一方、本調査の協力者は昭和 10 年生まれと 17 年生まれである。調査協力者の年代の違いによって、使われる語彙と使われない語彙に差が生じた可能性がある。

4. 結び

本稿は、漁業従事者にとって重要な風及び潮・波に関連した 61 の方言語彙を椴法華村（現在函館市）在住の現役漁師 2 名の協力を得て調査した結果と、そこから判明したいくつかの知見を明らかにした。ここで取り上げた自然現象を表す語彙には 3 つの共通の特徴が観察された。

1) 生態学的条件：方言語彙の使用地域の地理的位置づけや地形上の特有性に依存する。
2) 職業上の関心事：漁に直接関わる現象に照準が向けられる。
3) 使用地域の一般性と特殊性：方言語彙は指示対象の差異を含みながら広い地域で用いられるものと、当該地域にのみ限定的に使われるものに分かれる。風関連語彙は前者の傾向に属するのに対し、潮・波関連語彙は後者の傾向を示す。

漁は海を相手にし、船という可動性のある手段を使用するので、日本全国でかなりの数の共通名称を持つ漁業関連語彙が見つかるのは当然のことと言えるだろう。しかしながら、注意深く観察すると、指示する対象を異にしたり、指示の仕方に相違がある等の、地域による多様性が見て取れる。さらに、地域に限定された特有の語彙や世代による使用語彙の違いなども浮かび上がってくる。本調査を実施する中で、漁業を取り巻く環境の変化や漁業技術の革新によって、従来使用されていた多くの語彙が失われたり失われつつある現実に直面せざるを得なかった。地元の漁業従事者の協力を受けながら、あるいは埋もれた文献を丹念に紐解きながら、地道に調査を続けていくことこそが、漁業と密接に関連した方言語彙研究の最も妥当で確実な道なのである。

謝辞

* この調査研究は、平成 23 年度科学研究補助金（課題番号：23520540）の交付を受けて実施された「旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」における研究成果の一部を公にしたものである。語彙の使用状況や使用例、その他関連する貴重な情報に関して調査協力して下さった田中末廣・美枝子ご夫妻に心からの感謝を申し上げたい。また、共同研究者として全面的に支援して下さった室蘭工業大学塩谷亨教授並びに島田武准教授に謝意を表したい。もちろん、本稿の誤り等の責任は、著者ひとりに帰すものである。

注

[1] 椴法華村は、2004 年（平成 16 年）に、戸井町、恵山町、南茅部町と一緒に函館市と合併したため、村名がなくなってしまった。それゆえ、正確には「旧椴法華村」と表記すべきであるが、方言語彙を語る上で旧町村名は大切な役割を演じているので、以降、他の合併町名共々、「旧」を省いた形で表記することとする。

[2] 吉岡（2003）という貴重な文献を送って下さった石狩市教育委員会いしかり砂丘の風資料館学芸員の工藤義衛氏に深く感謝申し上げたい。この事典のおかげで、渡島半島沿岸部のさらに北に位置する石狩浜、

厚田浜周辺の漁業関連語彙の実態を知ることができた。

[3] 調査協力者は両名とも、「ショ」[ʃo]」でも「シヨ[ʃiyo]」でもなく、一貫して「ソ[so]」または「ゾ[zo]」と発音した。

[4] 『椴法華村史』と田中氏との解釈のずれを指摘してくださった査読者に感謝したい。

[5] 注 4 と同様に『椴法華村史』と田中氏との解釈のずれを指摘してくださった査読者に感謝したい。

[6] 石垣（1983）の採録地は椴法華村であるが、調査協力者は「アンバイ」を「アンベ」とは発音しなかった。

参考文献

石垣福雄 (1976) 『日本語と北海道方言』 北海道新聞社.

――― (1980) 『北海道（昭和 55 年度）各地方方言収集緊急調査　文字化原稿：椴法華村』「1.いわし漁全盛のころ；2.椴法華の祭り；3.いかつり漁法の今昔；4.漁船の変化；5.漁業後継者の問題」未公刊原稿, 1-89（通しページ）.

――― (1983) 『北海道方言辞典』 北海道新聞社.

恵山町史編纂室（編） (2007) 『恵山町史』 函館市恵山支所.

大沢哲夫 (1974) 『ほっかいどう語 - その発生と変遷 - 』 北海道新聞社.

大須賀るえ子 (2012) 『アイヌ語　白老方言辞典』 白老楽しく・やさしいアイヌ語教室.

小野米一（編）(1977) 『北海道漁村方言の研究 - 南茅部のことばと生活』　北海道教育大学旭川分校国語教室.

萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』　三省堂.

川内谷繁三 (1977) 「南茅部町の漁業語彙」　小野米一（編）(1977), 147-160.

菊平和子（編）(1992) 『ほっかいどう語 - 主として道南の浜ことば』　自費出版.

北の生活文庫企画編集室会議（編）(1999) 『北海道のことば』　北海道新聞社.

島田武・橋本邦彦・寺田昭夫・塩谷亨 (2001) 「椴法華（とどほっけ）における言語と風習 - 失われゆく伝統 - 」　『室蘭工業大学紀要』第 51 号、173-182..

――――― (2004) 「椴法華（とどほっけ）における言語と風習 - 失われゆく伝統 - (3)」　『室蘭工業大学紀要』第 54 号、79-90.

関口武 (1985) 『風の事典』　原書房.

尚学図書（編）(1986) 『国語大辞典』　小学館.

尻岸内町々史編さん委員会（編）(1968) 『尻岸内町史』　尻岸内町役場.

椴法華村（編）(1989) 『椴法華村史』　椴法華村.

橋本邦彦 (2012) 「渡島半島東岸部の漁業関係の語彙」　『北海道言語文化研究』第 10 号、23-37.

――― (2013) 「渡島半島東岸部の漁業及び海事関係の語彙について」　『室蘭工業大学紀要』第 62 号、69-80.

橋本邦彦・島田武 (2013) 「戦争前後の椴法華村の暮らし」　『北海道言語文化研究』第 11 号、21-47.

橋本邦彦・島田武・塩谷亨 (2012) 「椴法華の漁業について」　『室蘭工業大学紀要』第 61 号、77-88.

みちのく北方漁船博物館（編）(2002) 『特別展　海と船と漁労の記録 - 六カ所村泊地区 - 』　みちのく北

方漁船博物館.

南茅部町史編集室（編）(1992) 『南茅部町史』（上・下巻）　南茅部町.

吉岡玉吉 (2003) 『北海道日本海漁撈漁具用語事典』　自費出版.

類家直人（編）(2007) 『復刻版松前古老百話・白神』　松前古老百話・白神復刻実行委員会.

執筆者紹介

氏名：橋本　邦彦

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域

Email：92hashimot@gmail.com